

企画展「京都大学における「学徒出陣」」の開催

西山 伸†

1 概要

大学文書館では、第3回企画展として「京都大学における「学徒出陣」」を2006年1月17日(火)から4月2日(日)まで、時計台記念館1階歴史展示室内の企画展示室⁽¹⁾において開催した。企画展は、京大の歴史に関連した特定のテーマや資料にもとづいて年に1～2回開催する展示であり、隣接する常設展「京都大学の歴史」が原則として展示替えを想定していないため、常設展を補う意味も持つことになった。これまで大学文書館では、第1回「創立期の京都大学 一初代総長木下広次を中心に」(2004年6月1日～6月30日)、第2回「総長の肖像画」(2005年1月12日～2月27日)の計2回企画展を開催していた。本展示は、当館で行っていた平成16・17年度総長裁量経費プロジェクト「京都大学における「学徒出陣」」に関する調査・研究⁽²⁾の成果を公表する一つの場として企画されたものであった⁽²⁾。

展示期間は、当初3月5日(日)までを予定していたが、幸いに入場者も多く好評であったため、約1カ月延長することになった。後述のように、新聞等で多く報道されたこともあって、合計74日間の会期に10,525名の入場者を数えるに至った[表1]。

[表1] 歴史展示室入場者数(企画展開催時)

1/17 (火)	135	2/25 (土)	302
1/18 (水)	108	2/26 (日)	287
1/19 (木)	92	2/27 (月)	73
1/20 (金)	95	2/28 (火)	170
1/21 (土)	95	3/ 1 (水)	142
1/22 (日)	148	3/ 2 (木)	148
1/23 (月)	126	3/ 3 (金)	104
1/24 (火)	127	3/ 4 (土)	187
1/25 (水)	46	3/ 5 (日)	138
1/26 (木)	54	3/ 7 (火)	107
1/27 (金)	127	3/ 8 (水)	134
1/28 (土)	102	3/ 9 (木)	75
1/29 (日)	96	3/10 (金)	148
1/30 (月)	46	3/11 (土)	224
1/31 (火)	59	3/12 (日)	141
2/ 1 (水)	30	3/13 (月)	120
2/ 2 (木)	153	3/14 (火)	49
2/ 3 (金)	213	3/15 (水)	110
2/ 4 (土)	135	3/16 (木)	60
2/ 5 (日)	137	3/17 (金)	110
2/ 7 (火)	82	3/18 (土)	150
2/ 8 (水)	52	3/19 (日)	220
2/ 9 (木)	178	3/20 (月)	160
2/10 (金)	106	3/21 (火)	224
2/11 (土)	287	3/22 (水)	159
2/12 (日)	203	3/23 (木)	317
2/13 (月)	86	3/24 (金)	285
2/14 (火)	118	3/25 (土)	287
2/15 (水)	66	3/26 (日)	266
2/16 (木)	64	3/27 (月)	180
2/17 (金)	165	3/28 (火)	116
2/18 (土)	265	3/29 (水)	155
2/19 (日)	152	3/30 (木)	142
2/20 (月)	142	3/31 (金)	116
2/21 (火)	106	4/ 1 (土)	236
2/22 (水)	76	4/ 2 (日)	202
2/23 (木)	92	合 計	10525
2/24 (金)	117		

■は土・日および祝日

† 京都大学大学文書館助教授

2 内容

本展示では、原則としてケース1台およびその背後の壁面で一つのテーマを設定することとして、合計6テーマを設け、「学徒出陣」以前から復学までの流れを理解してもらうとともに、調査中の数値データによって「学徒出陣」の実態を示すよう努めた。以下、各テーマについて若干の補足説明を行うことにする（展示品およびその解説文は後掲）。

(1) [テーマ1] 戦時期の大学生

テーマ1においては、「学徒出陣」の前提として、戦時期の京大生に関する資料を展示した。1-1～5は、法学部に1943年10月に入学、その直後の12月に海軍に入団した安達耕一氏より寄贈を受けた資料である。1-1では、入学に際した諸手続について連絡した資料だが、その末尾に附記として

時節柄京都到着後食用米ニ就テ不便ヲ感セラ
ルカ如キコトアリテハ如何カト被存ニ付
各自ノ必要ニ応ジ予メ次ノ諸点ニ留意シ特ニ
外食等ノ手続ヲ為ス上ニ遺漏ナキ様其ノ
準備ヲ整ヘ置カル、ヲ便宜トス

一、約一週間分ノ食用米ヲ携帯スルコト

一、京都ニ於テ外食券ノ交付ヲ受クルニ必
要ナル市町村長又ハ町内会長ノ証明書
ヲ携帯スルコト

と記されていた。1-6・7は、1941年4月に文学部入学、1943年9月の卒業後陸軍に入営した梅溪昇氏所蔵の資料である。梅溪氏は、在学中の1941年10月に結成された報国隊の文学部大隊第二中隊第三小隊長に任命されている。梅溪氏によれば、氏の在学中の報国隊とは「(大学)本部からの命令を学生に伝達し動員するための連絡網」⁽³⁾であり、防空演習以外に実質的な活動は行われていなかったとのことである。

(2) [テーマ2] 出陣学徒壮行式(1)

テーマ2では、1943年10月に徴集猶予が停止

されてから学生たちが軍隊に入るまでを、11月20日に農学部グラウンドで行われた出陣学徒壮行式関係の資料を中心に展示した。2-1の『学徒出陣』は、読者対象として想定されたのが1943年7月に募集された海軍予備学生（飛行科は第13期、兵科は第3期）への応募資格のある学生であり、同年12月の「学徒出陣」組より1学年上であった。その後、「学徒出陣」という言葉が新聞等で頻繁に使われ出すのは、10月21日に神宮外苑競技場で首都圏の大学・高専77校を対象に行われた出陣学徒壮行会以後であると考えられる⁽⁴⁾。2-3の出陣学生代表の答辞は、法学部3回生吉村敏夫によって読まれたものである。そこでは、「今ニシテ学徒出陣ノ大命ヲ拝」することは「男子ノ本懐実ニ之ニ過グルモノナシ」と述べられた上で、「正ニ人力ノ限りヲ尽シ「義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも軽しと覚悟せよ」ト宣ウセシ大御心ニ生キム我等モトヨリ生還ヲ期セズ草莽ノ一死以テ皇国万代ノ安キニ任ズルヲ得バ我等ノ幸夫レ極レルト云ハムカ」と死の覚悟が表明されている⁽⁵⁾。

(3) [テーマ3] 出陣学徒壮行式(2)

テーマ3では、須田国太郎によって描かれた「学徒出陣図」を展示した。「学徒出陣図」は、1943年11月20日の出陣学徒壮行式の様子が描かれたもので、当時文学部講師だった須田に同学会が依頼して製作された。須田は、壮行式について「総長の送別の辞、マイクが山彦して一齣々肺腑を衝く、残留生代表の壮行の辞、出陣代表の答辞、これにつづいた分列行進、いづれも沈痛なる悲壮そのものである」と記した上で「武人が武人としてではなく、武人としての学生を我々は、この壮行式に於てみてゐるのである。そこには何等の華々しさはない」と当時の新聞に文章を寄せている⁽⁶⁾。出席者の証言によれば、当日は快晴だったということだが⁽⁷⁾、絵の暗い色調からはとても想像できず、描いたときの須田の思いは単純な戦

意高揚からはほど遠いものだったことが推察される。「学徒出陣図」は、百号の大作となり、翌年6月の創立記念日に除幕式が行われた⁽⁸⁾。その後敗戦まで大ホールに飾られていたが、戦後行方不明となり、1979年に倉庫から「発見」されて総長室に飾られるようになったという⁽⁹⁾。そして、京大創立百周年によって時計台が改装されてからは、旧総長室である迎賓室に引き続き飾られて現在に至っている（通常は非公開）。

（４）[テーマ４] 学徒兵たち

テーマ４では、軍隊に入った学徒兵たちの様子が分かる資料を展示した。陸海軍とも、入隊した学徒兵の軍隊内での進路には何種類かあった⁽¹⁰⁾が、４－３および４－５では海軍経理学校に進んだ学徒兵関係の資料を展示した。４－４と４－６は時岡鶴夫氏関係の資料である。時岡氏は1942年4月に経済学部入学、1943年12月に「学徒出陣」により海軍入団、第14期飛行科予備学生に採用されて操縦に進み、特攻隊に編成され1945年5月14日に出击、戦死している。４－４では時岡氏が訓練期間中に実家に送った多数の手紙の一部を、４－６では出击直前に鹿屋基地に訪ねてきた母繁子氏との対面の様子をとらえた写真を展示した⁽¹¹⁾。

（５）[テーマ５] 戦没者

テーマ５では、京大出身の戦没者に関する資料を展示した。戦没者慰霊祭に関する資料、京大出身者の関連する遺稿集のほか、５－７では今回の調査の成果として在学中の戦没者数を示した⁽¹²⁾。

（６）[テーマ６] 学徒出陣に関するデータ

テーマ６では、「学徒出陣」についての説明と、今回の調査の成果として入隊者数を示した。

３ 反響

（１）アンケート

歴史展示室に常備しているアンケートに本展示に関連して記入された意見・感想は以下のとお

り。

- ・展示までのご苦勞に感謝いたします。戦後60年戦争を知らない人が多くなりました。戦争はどんな理由であれ許されません。永久に展示を望みます。参会者の少ないのが残念です。(74歳)
- ・こんな時代があったことを、子供にも見せてあげようと思った。
- ・今の若い人に戦争をかたりつぎたい。(72歳)
- ・もっと多くの資料等が集められ、展示されるものと期待して来ましたが、それが少なくて少々期待はずれでしたが、重要な企画展示の意義であると考えました。私は1943年秋の入学（理学部）でグラウンドでの壮行式典にも出席した記憶があり、病休後復学、48年頃に創立50周年記念事業に参加した経験があります。(82歳)
- ・できれば常設を希望します。(70歳)
- ・海軍航空機の数計高度計等生産している工場へ大学生が生産作業に来られた話中、特に京大生の話、天才秀才生が戦死惜しまれていた。生存されていれば社会に大いに貢献されたのに惜しい。
- ・憲法改正が当然のようにになっている現在の風潮にあって、二度と戦争が起こらないよう、大学として社会にアピールしてほしい。政治家の言いなりの社会に危機感を感じている。(61歳)
- ・地道な資料調査の成果を公開していただき有難うございました。報告書が出るのを楽しみにしています。(40歳)
- ・若い命をもったいない。ムダに死なせて。(70歳)
- ・亡くなったのが息子のバースデイと同じ方でした。あと20日で終戦。世界人類の日本への怒りの気晴らしのひとつになればと散っていく私、なんという諦観。本当に無名のいくたのギセイがあったとあらためて思う。公立の中学の卒業式にかかげることを強制される日の丸とここにある日の丸の罪は同じなのに。あー歴史は

繰り返される。(50歳)

- ・「学徒出陣」時代在学(42～45)していたので感慨深いものがあった。学友も幾人が戦死しているので名簿を見たい思いがした。「第二次大戦と京大」のテーマで学徒出陣を含めて再度展示会を開いてほしい。(84歳)
- ・これはこれで感動したが一方野間宏の「暗い絵」にある京大反戦学動のことも紹介してほしい。(57歳)
- ・貴重な記録であり、平和への礎である。資料の貧弱さに驚く、大学の卒業生のファミリー感覚の薄さに驚く。徹底した資料の収集・調査・研究をし「京大平和博物館」を建設されたい。(69歳)
- ・是非出版物の形で配布(販売)して下さい。(80歳)
- ・学徒出陣の展示会をみによせていただきましたが、涙が一杯になりました。(75歳)
- ・大変感動いたしました。涙を禁じ得ませんでした。(80歳)
- ・戦争の中、日本人として戦いに行かなければならない(死を目の前にして)。今現在、アメリカと接近している、とても怖い。アメリカと仲良くしすぎて、他の国との戦争に巻き込まれるおそれ！(50歳)
- ・壮行式の写真、62年前のことだが両側に残る学生が並んで見送ってくれたことを鮮明に思い出す。学徒兵の遺品もっと展示できなかったものだろうかとも思いましたが。(84歳)
- ・子を持つ親としてたまりません。(50歳)
- ・とても貴重な資料で心がひきしまった。(52歳)
- ・私は学徒出陣世代のもう少し若い世代です。学徒動員令により学業半ばで工場動員を余儀なくされ、長崎市近郊で地下壕で人間魚雷を作らされていました。14、5歳の少女で占められていました。痛ましい現実を経験しました。(70代)
- ・研究(出征学徒について)なさっているとか。

さらに新しい資料を加え展示会を催してほしい。本や資料を印刷して販売していただきたい。(64歳)

- ・歴史の長い京都大学のことですから、歴史的資料はもっともっと豊富であるように思われます。現在の展示ではあまりにも貧弱な気がいたしました。(84歳)
- ・もう少し多くの資料展示を。(58歳)
- ・終戦時陸軍航空隊(南京)で迎えましたが沖縄の状況は通信関係にいたので手に取るように判りました。戦後鹿屋知覧には度々訪れています。沖縄の終戦は5月です。特に20年1～4月は多数の出撃があったと思います。(78歳)
- ・京都大学は戦争反対、軍隊不用と思っておりました。しかしながら、このような企画をされ最高の教育機関として公平さを持って、このような貴重な資料を保管されているのに再認識しました。これからもよい日本国を維持するために若人の指導をお願いします。(64歳)
- ・私も教師になった20歳のときに徴兵され3年間野戦を体験しましたので、展示の一つ一つに感銘を受けました。(83歳)
- ・予想外に展示品数が少ない印象。出陣学生のおひとり林市造氏の姉上は私の元上司の夫人であり、市造氏のお話はしばしばお聞きしていた。同夫人の著書である『日なり楯なり』が展示されており、また日章旗の寄せ書きにも同氏の筆跡が見られたことは大いに嬉しい限り。(71歳)
- ・貴重な資料です。永く保存してください。(81歳)
- ・学徒出陣の展示に胸うたれました。より生々しい形で当時の様子また学生たちの純粋な気持ちを知り、今の情勢とあわせ危機感を改めて抱きました。このような展示をもっともっと一般の市民にも見ていただき、戦争の悲惨さを体感してほしいと念じています。(57歳)
- ・できれば毎年の行事にしてほしい。

- ・何十年か前「きけわだつみのこえ」を読んだことがあります。今日実際に本物を読ませてもらい、今の自分たちのことと考え合わせると涙が出そうになりました。9条を廃止するなんてとんでもないことです！（59歳）
- ・日本の現状（惨状）を見ると、若くして国に命を捧げた人たちに申し訳ない気持ちでいっぱい。（71歳）
- ・実父がまさに学徒出陣をし、当時の様子を子ども頃から聞いていました。大義の命の下に若い時代をホンロウされた父の心に少しでも寄り添えればとの思いからです。（55歳）
- ・学徒出陣に関して継続的な展示をお願いしたいです。（52歳）

（2）取材等

開幕前日の1月16日に、内覧会および記者発表を行い、テレビ・新聞の取材が数多くあった。朝日放送およびKBS京都のニュースで取り上げられたほか、いくつかの新聞でも記事となった⁽¹³⁾。その多くが、見出しに出陣学徒数や戦没者数を掲げており、大学文書館による今回の調査目的およびそれを踏まえた展示の趣旨を正確に捉えた上での記事であったと言える。

また、劇団四季が「昭和の歴史三部作」の一つとして公演している『ミュージカル南十字星』では、主人公が京大出身で陸軍入営後インドネシアに配属されて戦後BC級戦犯で刑死すると設定されていた。ちょうど4月から京都公演が開始される関係で、3月2日に主演の阿久津陽一郎氏が展示を見学に訪れ、さらに阿久津氏と西山の共同記者会見が行われ多数の取材陣が訪れた⁽¹⁴⁾。

4 まとめ

今回大学文書館で行った「学徒出陣」調査研究およびその成果の一つとしての展示は、京大で初めて行われたことであり、社会的な注目度も高く、多数の来場者があった。そういったなかで、中間

的な成果とはいえ出陣学徒数、戦没者数などの数値データを提示できたことは大きな意味を持つと考えられる。

その一方で、その他の資料については、アンケートにも見られるとおり分量的に不満を感じられる向きが多かったようである。展示スペースの大きさが限定されていることも原因ではあるが、それよりも文書資料・モノ資料を問わず「学徒出陣」関係の資料が京大にほとんどないことが大きい。アンケートに寄せられているような継続的な展示を今後行っていくとするならば、卒業生等に広く呼びかけて資料の寄贈・寄託を求めていく必要があるだろう。

〔註〕

- （1）企画展示室は、広さ約40㎡、常設展示室に隣接して設けられており、平型の覗きケース4台、大型ハイケース1台の計5台の展示ケースが置かれている。
- （2）同調査研究の成果は、京都大学大学文書館編『京都大学における「学徒出陣」調査研究報告書』（以下、『報告書』）全2巻にまとめられ、2006年3月（第2巻）・7月（第1巻）に刊行された。
- （3）前掲『報告書』第2巻、142ページ。勤労動員の単位として活動が目立つようになってくるのは、梅溪氏の卒業後であろう。
- （4）同前、第1巻、8ページ。
- （5）答辞の全文は、京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』資料編2、2000年、469ページ参照。
- （6）『京都帝国大学新聞』1943年12月5日付。
- （7）前掲『報告書』第2巻、106ページ。
- （8）『京都新聞』1944年6月19日付。
- （9）『朝日新聞』1979年12月16日付。
- （10）前掲『報告書』第1巻、21ページ。
- （11）展示した手紙を含めた時岡氏の関係資料は、前掲『報告書』第1巻、142ページ以下に復刻した。

また、4－6の写真は、当時『読売新聞』1945年5月17日付に掲載されたものである。

なお、時岡氏の関係資料の一部は、常設展「京都大学の歴史」でも展示している。

- (12) その後の調査により新に多くの戦没者が判明した。展示資料(105ページ〔表1〕)と同じ1942年4月から1945年4月入学者を対象に各学部別に判明した数値は以下のとおりである。

文学部	46 (13)
法学部	109 (34)
経済学部	63 (18)
理学部	1 (0)
医学部	3 (0)
工学部	4 (1)
農学部	26 (5)
計	252 (71)

() 内は戦病死者数(内数)

52人分の増加は、学籍簿に記載されていない、あるいは学籍簿が見つからず、他の印刷物等で戦没が確認されたことによる。前掲『報告書』第1巻、2・88ページ。

- (13) 『京都新聞』2006年1月17日付朝刊、『読売新聞』同日付朝刊、『毎日新聞』同日付朝刊、『朝日新聞』2006年1月19日付朝刊、など。

- (14) 『ラ・アルプ』4月号、2006年4月、20ページ。

企画展「京都大学における「学徒出陣」 展示品一覧

0－1 ごあいさつ

大学と戦争との関わりのなかで、第二次世界大戦に際しての「学徒出陣」はよく知られた重要な出来事だったにもかかわらず、その全体像は敗戦後60年以上経過した今でも必ずしも明らかになっていません。当館では、昨年度から総長裁量経費の採択を受け、京都大学における「学徒出陣」について調査・研究を行ってきました。本展示では、その成果の一部も公表いたします。貴重な資料をご提供いただいた方々をはじめ、ご協力下さった皆様に厚くお礼を申し上げます。

〔テーマ1〕戦時期の大学生

1－1 入学手続についての通知

1943年10月の法学部入学者への通知。附記からは、当時の京都の食糧事情が窺える。

1－2 有信会案内

有信会は1921年に設置された法学部教員・学生・卒業生の親睦機関。この冊子は1943年10月の新入生歓迎会で配付された。

1－3 学用ノート引換券

1943年10月の入学生に配られたもの。すでにノートも配給制になっていた。

1－4 市営電車の乗車券

1-5 徴兵延期者解消に関する件通牒

徴集猶予が廃止になった学徒たちは、本籍地で臨時徴兵検査を受けることになった。この資料は、役場から学生の実家に宛てて検査のため学生を帰郷させるよう促したもの。

1-6・1-7 報国隊関係資料 ※1-6 報国隊組織図、1-7 報国隊打合会・座談会 通知（3点）

1941年9月、指揮系統の確立した全校組織の樹立を求めた文部省訓令に基づき、京大でも報国隊が置かれた。報国隊は、軍隊組織を模した学部別の隊と居住地別の班から構成され、非常時に備えた心身の鍛練、非常時の防衛・救護・警備などを目的とした。また、戦争末期には勤労働員の単位にもなった。（梅溪昇氏所蔵）

1-8 飛行機の前で記念撮影する機械工学科の学生たち（1937年頃）（写真）

1-9 防空演習の様子（1943年頃）（写真）

こういった演習は報国隊によって行われた。学生たちの足にはゲートルが巻かれている。後方左に文学部陳列館、右に法学部経済学部研究室（赤煉瓦）が見える。

[テーマ2] 出陣学徒壮行式（1）

2-1 『学徒出陣』

1943年8月発行。日米決戦の時にあたり、アメリカに倣って日本の大学生も積極的に軍隊を志願すべきと説く。「学徒出陣」という用語の使用例としては、最初のものと言われている。なお、述者の高戸顕隆は京大卒業後に海軍経理学校入校、このときは海軍主計中尉だった。

2-2 出陣学徒壮行式次第 評議会関係書類仮綴（01A00674）

1943年11月20日、京都大学の出陣学徒の壮行式が農学部グラウンドで催された。残された資料には、式辞で羽田亨総長が「神かけて諸子の武運長久を祈るのみ」と述べたと記されているが、出席した学生の中には「生きて帰ってこい」という趣旨の言葉があったと記憶している人もいる。

2-3 出陣学徒壮行式における出陣学生代表の答辞（複製）

2-4 寄せ書きされた日の丸（2点）

入隊が決まった学生たちの多くは、恩師や友人などをまわって日の丸への寄せ書きを依頼した。

2-5 壮行式後、正門を出る「出陣学徒」（写真）

2-6 京都における各学校の壮行式を伝える新聞記事（京都新聞 1943.11.20 夕刊）

[テーマ3] 出陣学徒壮行式（2）

3-1 学徒出陣図

文学部講師を勤めていた洋画家の須田国太郎が、1943年11月20日に京大農学部グラウンドで行われた出陣学徒壮行式の様子を描いたもの。翌1944年6月の京大の創立記念日に披露された。当時の新聞に須田自身が「そこには何等の華々しさはない」と述べているように、絵の暗い色調からは単純な戦意高揚にはほど遠い須田の思いが窺える。

3-2 須田国太郎（1891～1961）

京都府生まれ。第三高等学校から京都帝国大学に進み美学美術史を専攻。関西美術院で学んだ後渡欧、主としてスペインでバロックを研究、セザンヌにも興味を抱いた。1932（昭和7）年個展を開催、

1934年独立美術協会の会員となってから京都の洋画壇に大きな影響を与えた。京大の文学部などで講師を勤めたのち、1950年に京都市立美術大学（現在の市立芸術大学）の教授となった。

[テーマ4] 学徒兵たち

4-1・4-2 仮合格証書と合格証書

1943年12月入隊者のうち、1942年4月の大学入学者は、わずか1年8ヵ月の在学で仮卒業の措置が採られ、入隊中の1944年9月に卒業とされた。上は入隊直前に渡された仮合格証書。下は実家に送られた合格証書。

4-3 海軍経理学校の教科書（2点）

学徒兵の中には、海軍経理学校への入校を命じられ主計科短期現役士官を目指す者もいた。彼らは通常の訓練以外に、軍隊における様々な実務に関する知識を教え込まれた。（常田滋彌氏所蔵）

4-4 学徒兵から実家に送られた手紙

学徒兵の多くは、入隊後1年弱にわたる様々な訓練を受けたのち、実戦部隊に配属されていた。この学徒兵は、海軍の飛行科予備学生となり操縦士としての訓練を受けた。

4-5 海軍経理学校における訓練の様子（写真）

カッター漕ぎは、海軍の重要な訓練だった。（常田滋彌氏所蔵）

4-6 特攻出撃数日前に母と語らう京大出身の学徒兵（写真）

経済学部から海軍に入った時岡少尉は特攻隊員に編成された。そのことを知った母は、九州の基地を捜しまわり出撃数日前に最後の対面をすることができた。右から二人目が時岡少尉、その隣が母繁子さん。

[テーマ5] 戦没者

5-1 戦没者合同慰霊祭についての簿冊 01A00048

京大では戦時中も含めて合計4回戦没者の慰霊祭が行われた。1946年10月に行われた最後の慰霊祭では、職員66名、学生56名の戦没者が対象とされた。

5-2 『きけわだつみのこえ』

日本戦没学生手記編集委員会によって編集された戦没学徒兵の遺稿集。BC級戦犯容疑で刑死した木村久夫（高知高等学校から1942年4月経済学部入学）をはじめ、7名の京大関係者の遺稿が収められている。1949年刊。（京都大学文学部図書室所蔵）

5-3 『わがいのち月明に燃ゆ』

林尹夫^{ただお}（第三高等学校から1942年10月文学部入学、1945年7月28日四国沖で戦死）の日記と遺稿。深い教養と自らの運命への懊悩が読み取れる。1967年刊。（京都大学附属図書館所蔵）

5-4 『日なり楯なり』

林市造（福岡高等学校から1942年10月経済学部入学、特攻隊に編成され1945年4月12日与論島東方で戦死）の家族への手紙。母への深い愛情が記されている。1995年刊。

5-5 『魂魄 南溟に捧げし青春』

旗生良景（福岡高等学校から1942年10月経済学部入学、特攻隊に編成され1945年4月28日南西

諸島方面で戦死）の遺稿。1歳下の弟徳男も前年に戦死していた。1997年刊。

5－6 第4回戦歿者合同慰霊祭の様子（1946年10月29日）（写真）

5－7 在学中の戦没者数

学内資料によって判明した在学中のまま戦没した学徒兵の数は表1のとおりである。全入隊者の5%弱が戦没した計算になる。しかし、学内資料の記載事項にも不十分な点があり、他の資料と突き合わせることによって、合計はもう少し増えると考えられる。さらに、卒業生も含めた戦没者数となると、正確な算定は難しいが、この数倍に及ぶと予想される。

また、戦没時期について表2に示した。彼らは入隊後1年程度の訓練を経て、1944年の終わり頃から実戦部隊に配属される例が多かったため、多くの者の戦没時期はそれ以降となる。また、敗戦後にも少なくない数があがっているのは、シベリアや南方等での戦病死者が含まれているのと、資料に実際の戦没日ではなく大学への届出日のみが記されている場合があるからと考えられる。

〔表1〕 学部別戦没者数

文学部	42 (12)
法学部	93 (32)
経済学部	39 (10)
理学部	1 (0)
医学部	
工学部	4 (1)
農学部	21 (4)
総 計	200 (59)

・医学部は未調査

・（ ）内は戦病死者数（内数）

〔表2〕 戦没時期

1944 年以前	33
1945 年 1 ～ 3 月	33
1945 年 4 ～ 6 月	58
1945 年 7 月 ～ 8 月 14 日	25
1945 年 8 月 15 日 ～ 12 月	18
1946 年以後	24
不 明	9
総 計	200

〔テーマ6〕 学徒出陣に関するデータ

6－1 学徒出陣

1943（昭和18）年10月、戦局の悪化に伴い、それまで学生生徒（学徒）に認められていた徴集猶予が文系を中心に廃止になり、満20歳以上の学徒は陸海軍に入隊することになった。これが「学徒出陣」である。すでに1941年より在学年限が短縮されていて、卒業を繰り上げられた者たちが次々と徴集されていたが、この段階からは在学中の学徒にまで及ぶようになった。以後、敗戦まで全国の高高等教育機関から多数の学徒が徴集されていくことになる。一方、朝鮮・台湾出身の学徒たちには兵役は適用されていなかったが、彼らは「特別志願兵」という形で徴集された。

入隊した学徒兵たちは、飛行機の操縦、最前線の指揮官、主計、軍学校の教官など様々な役割を軍隊の中で果たしていった。彼らの中には特攻隊などに配属されて戦死した者も多く、また幸いに生きて帰ってくることできた者にとっても、「学徒出陣」の体験はその後の人生に深い刻印を残すものとなった。

6－2 京都大学における「出陣学徒」数

1943年10月に徴集猶予が廃止になったのは、主に文系学部（教員養成系を除く）だった。京大の場合、文学部・法学部・経済学部および農学部の3学科（農学・農林生物学・農林経済学）がそれに

該当し、理学部・医学部・工学部と農学部に残り3学科（林学・農林化学・農林工学）の学生は引きつづき在学中の徴集を猶予されることになった。

この時、前者の学生たちの大部分は臨時徴兵検査を経て1943年12月に一斉に陸海軍に入隊した。彼らが狭義の「学徒出陣」組になるが、これ以後も後続の新入生たちを中心に、敗戦までに多くの学生が入隊していった。また、少数ではあるが、徴集猶予廃止前に入隊した学生や、徴集猶予の対象となっている学部から入隊した学生もいて、京大から在学の身分のまま入隊した学生の合計は4,400人を超える。[表1]

一方、朝鮮・台湾出身の学生は、兵役制度の適用を受けていなかったが、「特別志願兵」という制度が設けられて、内地出身の学生より少し遅れて1944年1月に入隊していった。志願しない学生には休学させるよう文部省から通知が出されており、事実上の強制であったといわれている。[表2・3]

[表1] 内地出身者

		入学者	1943年11月 以前に入隊	1943年12月 に入隊	1944年1月 以降に入隊	入隊年月日 不明	入隊者 合計	入隊者 の割合
徴集猶予停止の学部	文学部	892	17	296	289	1	603	67.6 %
	法学部	2413	54	880	1105	82	2121	87.9 %
	経済学部	1376	33	604	601	1	1239	90.0 %
	農学部A	407	13	140	111	20	284	69.8 %
	小計	5088	117	1920	2106	104	4247	83.5 %
徴集猶予の学部	理学部	582	10	2	16	3	31	5.3 %
	医学部	874	9	1	9	0	19	2.2 %
	工学部	2041	29	1	63	4	97	4.8 %
	農学部B	434	9	1	36	0	46	10.6 %
	小計	3931	57	5	124	7	193	4.9 %
総 計		9019	174	1925	2230	111	4440	49.2 %

・「農学部A」は、農学部のうち徴集猶予停止となった農学科・農林生物学科・農林経済学科の合計を、「農学部B」は徴集猶予が継続された林学科・農林化学科・農林工学科の合計を示す。

[表2] 朝鮮出身者

	入学者	入隊者	入隊者の割合
文学部	11	4	36.4 %
法学部	27	18	66.7 %
経済学部	3	0	0.0 %
農学部A	6	1	16.7 %
総 計	47	23	48.9 %

[表3] 台湾出身者

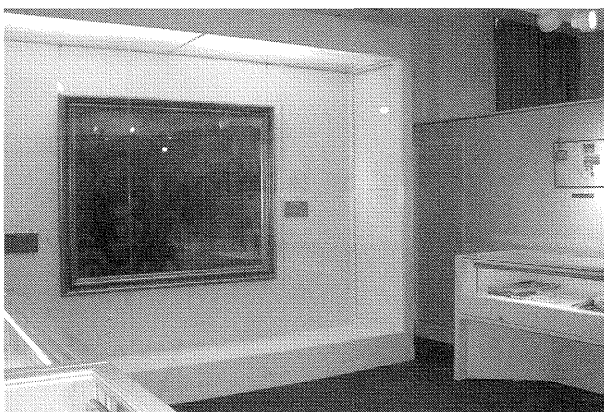
	入学者	入隊者	入隊者の割合
文学部	1	0	0.0 %
法学部	5	3	60.0 %
経済学部	3	2	66.7 %
農学部A	2	1	50.0 %
総 計	11	6	54.5 %

※表の見方

- ・徴集猶予廃止措置がとられて以降の学生を対象とするため、1942年4月から1945年4月までに入学した学生を表記した。
- ・「農学部A」は農学部のうち徴集猶予廃止となった農学科・農林生物学科・農林経済学科の合計を、「農学部B」は徴集猶予が継続された林学科・農林化学科・農林工学科の合計を示した。
- ・表1・2・3以外にも中国やその他の国・地域から入学した学生がいるが、彼らは兵役の対象となっていないため、表記しなかった。
- ・徴集猶予の学部に所属していた朝鮮・台湾出身者の入隊者はなかったため、表記しなかった。



〔写真1〕テーマ1およびテーマ2



〔写真2〕テーマ3



〔写真3〕テーマ4およびテーマ5